

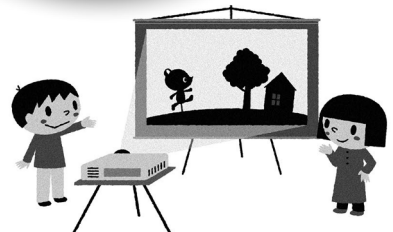
横浜市南部の丘陵地帯に位置する南永田団地。みなとみらい地区のビル群や、遠くに富士山を望む緑豊かな環境のなか、約2500世帯が暮らす大規模団地だ。

お昼どき、団地商店街の一角に、一人、また一人と人が集まってくる。お目当ての場所は「サロンほっとサライ」。

隣接する永田台中学校美術部の生徒が描いたダイナミックなウインドウアートの扉を開けると、エプロン姿の女性たちが明るい笑顔で出迎えてくれる。取材に訪れた3月8日のランチは、照りブタ角煮のメインにフキノトウの天ぷらなど副菜2品、味噌汁付きで500円。20席ほどの店内は、すぐにいっぱいになる人気だ。ランチ終了後の午後2時から、団地内にある永田台小学校の6年1組児童が手づくり影絵の会を開催。代表の子供たちが「影絵が完成したので、ご覧ください」と挨拶したあと、影絵を映した映像をパソコンからサロン内のプロジェクターに投影。かわいらしい



影絵に、コーヒーを楽しむお客さんから温かな笑顔と拍手がわきあがった。



阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

○住民が結束してサロンを開設

人のつながりと活気を取り戻す 団地のコミュニティサロン

神奈川県横浜市 南永田団地
コミュニティ拠点「サロンほっとサライ」
2019年●平成31年～

サロンを運営するのは、団地住民らなるNPO法人「永田みなみ台ほっとサライ」だ。事務局長の渡辺乃志男さんにお話を伺った。

「私が住み始めたのは49年前ですが、その頃は子供がいっぱいで、商店街にもお店がたくさんあって、すごくにぎやかでした。それが20年ほど前から空き店舗がだんだん増えて、活気もなくなってね。なんとかしたい、みんな元気になろう！と、2015年に横浜市が推進するまちづくり人材育成を目的とした『寺子屋みなみ』という勉

強会を始めました。翌年には、その活動を継続させようと、『永田みなみ台まちづくり運営委員会』を設立したんです」

団地に活気を取り戻すために委員会が始めたのが、「つながり祭」だ。団地を管理するUR都市機構の協力で、商店街の空き店舗と中央広場を開放。小学生が考案した「赤ちゃんからお年よりまで、みんな集まれつながり祭」を合い言葉に、バザーや模擬店、永田台小学校生徒や地域住民によるダンスや演奏会などで大盛り上がり。以来、2か月に1回のペースで開催し、団地の恒例行事となっている。

そして、まちの活性化と多世代交流の場づくりとして、空き店舗を活用したサロンづくりの計画が立ち上がる。「それだから、本当に大変でした」と話すのは、副理事長の佐藤明美さんだ。「開業資金を集めるために、募金箱を持ってあちこち行ったり、地域の皆さんに協力してもらったり。冷蔵庫も電子レンジも食器も、すべてもらいものなんです。苦労の末にNPO法人化して資金も集まり、オープンにこぎつけたときは、本当にうれしかったです」

「ここです出ずお料理は、皆さんに季節

感を味わってほしくて、すべて手づくりです。食材は団地内のスーパーで買うほか、お客さんがタケノコなどの食材を持ってきてくれたりね。毎日通ってくれる常連さんもできて、コロナ禍でお休みしたときは『いつ開くの?』って、たくさん聞かれました」と理事長の香西玲子さんも言葉を継ぐ。

「最初は女性客が多かったけど、最近では男性客も増えてね。みんなのよりどころになっていと思うと、うれしいですね」と渡辺さん。

現在、スタッフは25名。最高齢は82歳で、10年先まで続けると元気いっぱいだとか。サロンのオープン後は、商店街にいくつかの店舗が出店。団地に活気を取り戻す呼び水にもなっている。

○活性化のために 地域と連携

「南永田団地は、お住まいの方々の結束力と熱意が非常に強いんです。我々URも、その盛り上がりにつられて、地域との関わりを深めてきました」と話すのは、当団地を担当するURの宮内明子だ。



サロンで明るく元気に振る舞う姿に訪れる人はみんな元気をもらえる。

「サロンほっとサライ」のオープンに向けては、活用できる制度などを検討。オープン後は、管理サービス事務所をサロンの隣に移転。高齢者の相談などにきめ細かく応える生活支援アドバイザーを常駐させるなど、連携体制を整えた。

「困ったことがあるとすぐに相談できて、本当に心強い」と佐藤さん。宮内も「この地域の盛り上がりを保つためにも、つながり祭のようなイベントだけでなく、日々起こる小さなことも一緒に解決して、皆さんを支えていければ」と、笑顔で話す。

団地住民の盛り上がりは、地域の活性化にも役立っている。永田台小学校の児童は、つながり祭に参加するだけでなく、開催1時間前から地域の清掃活動を実施。冒頭の影絵会のようなイベントも行うほか、4年生は佐藤さんが指導してつくった堆肥で野菜を育て、サロンへ提供するなど、地域の一員となって活動を盛り上げている。

これほどまでに活動に熱意を持つ理由は？と渡辺さんに尋ねると「ここで育った子供たちにとって、団地は大切なふるさとです。これからも、子供たちが楽しみに帰ってこられるようなまちにしていきたい」と胸の内を明かしてくれた。

「今後は、URさんとも協力して、高齢者や単身者などの見守り拠点としての活動もしていきたい」と佐藤さん。

サロンの開設から、この4月で3年。ペルシャ語で「宿、家、オアシス」を意味する「サライ」は、団地、そして地域の貴重なオアシスとなっている。

街に、ルネッサンス

UR都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作]新潮社